

ユリカモメを もっと知りたい



1974年1月、鴨川にはじめてやってきたユリカモメ。渡来数も年々増え、今や1万羽近くが京都市内の河川で冬を過ごし、京都の冬の風物詩となっています。彼らは、どこで夜を過ごし、どんな風にエサをとるのだろうか？彼らはどこで子育てをするの？ユリカモメのことをもっと知れば、もっと仲良くなれるはずです。

「ユリカモメについて」

カモメというと港や海辺の風景にでてくる鳥ですが、ユリカモメは昔から内陸の河川や湖で生活していました。鴨川周辺には、毎年10月下旬に姿をあらわし、翌年の5月上旬まで滞在します。

〈わかどり〉



くちばしと足が黄色っぽく、尾羽の先に黒い帯があるのがわかどりです。わかどりは、群れの中に1割ほどまじっています。わかどりは、生まれて初めての冬の姿です。翌冬にはおやどりの姿になって越冬地に戻ってきます。

〈おやどり〉



くちばしと足が赤く、尾羽が真っ白なのが、おやどり（成鳥）です。黒いつぶらな瞳が、とってもかわいらしい^{せいそ}清楚な姿をしています。

〈夏羽〉



ユリカモメは英語では、黒い頭のカモメ (Black-headed Gull) と呼ばれています。これは黒い頭をしているユリカモメの夏羽から由来しています。こういったユリカモメの姿は、4月になると鴨川でも見ることができます。冬に私たちが接している白っぽい姿はユリカモメの冬羽なのです。

〔伊勢物語の都鳥〕

平安時代、はるばると都から旅をしてきた一行は、隅田川で赤いくちばしと足を持つ白い鳥をみつけました。船頭から、この鳥は「都鳥」とであると教えられ、都を思いだして皆泣いてしまったと伊勢物語は伝えています。都鳥はユリカモメの古い呼び名です。遷都後1200年たった京都で、ユリカモメは、人々を楽しませてくれます。

ユリカモメの多様な採食行動



鴨川はユリカモメにとって格好のエサ場。彼らは、どんなエサを、どんな風に食べているのでしょうか。エサのとりかたは、とってもバラエティーに富んでいます。彼らは「何でもやさん」の生き方によって、たくましく冬を過ごすことができるのです。

つまんで食べる

上流から流れてくる小さな虫などを、ピンセットでつまむように、ちょんちょんとつまんで食べます。小さなエサも大きなエサも、幅広く食べます。

潜って魚を

ユリカモメにとって一番のエサはやっぱ魚です。飛びながら魚を見つけると、飛び込み、潜って魚を捕まえます。

足踏みをして虫を追い出す

浅瀬で足踏みをしているユリカモメもよく見られます。泥の中や石の下にいる水生昆虫や小魚を追い出して食べるのです。

空中でキャッチ

ユリカモメは飛びながら、トンボなどの昆虫を上手に捕らえることもできます。

パンくずのごちそう

厳寒期には、人々が与えるパンくずも大切なエサとなります。パンくずも空中で上手にキャッチすることができます。

ユリカモメは夜をどこですごすの？

ユリカモメの鳥柱

川の中でエサを食べていたユリカモメも、午後になると特定の中洲に集まってきて、居眠りをしたり、水浴びをしたり、羽づくろいをするようになります。夕方になると、一斉に飛び立ち、次々と新しい群れが加わって、大きな群れが輪を描くように舞い上がります。夕陽に照らされ、鳥柱^{とりばしら}とよばれる群れが上空へ飛び立つ光景は、とても印象深いものです。

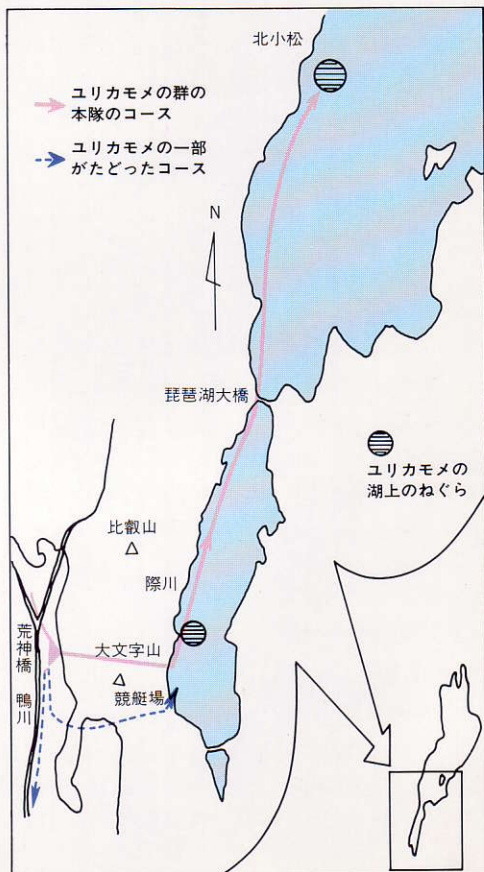


ユリカモメのねぐら

ユリカモメの群れは、いくつかのコースを通って東山を越え、夜は、琵琶湖の沖合いに集まって夜を過ごします。時には、淀川を下って大阪湾で過ごすこともあります。

ユリカモメの出勤

琵琶湖で目覚めたユリカモメは、一斉に出発し、夕方と逆のコースで京都市内に入ってきます。



ユリカモメのふるさと



①



秋から冬に京都市内で過ごすユリカモメは、春になると北国に帰ります。彼らのふるさとはどこでしょうか、どんなところで子育てをしているのでしょうか。

〈足環のついたユリカモメを手がかりに〉

1978年の秋、金属の足環のついたユリカモメが多数鴨川で見つかりました。その足環を手がかりにして、京都のユリカモメの研究者たちはロシアのカムチャッカ半島に住む鳥類学者（ニコライ・ゲラシモフ博士）と連絡を取り、鴨川にやってくるユリカモメが、カムチャッカ半島をふるさととすることを突きとめました。

〈カムチャッカからの3,000キロの旅〉

カムチャッカ半島の東南部、アバチャ川河口の湿原に数万巣もあるユリカモメの集団営巣地ができます。ユリカモメは5月末に卵を産み、7月に雛は巣立ちます。河川が凍結する10月までに、京都への3,000キロの長旅がはじまります。

③



②



〈赤い足環のついたユリカモメ〉

1990年より、カムチャッカでゲラシモフ博士は、京都から送った赤い足環をユリカモメにつけています。赤い足環をつけたユリカモメは鴨川をはじめとする全国各地で確認されています。

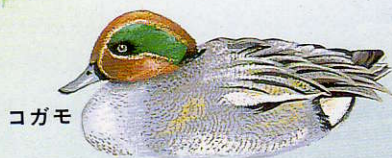
写真① ユリカモメの巣の中の卵と雛

写真② 赤い足環をつけるゲラシモフ博士

写真③ 鴨川で発見された赤い足環のついたユリカモメ

ユリカモメとその仲間たち

鴨川に集まるのはユリカモメだけではありません。1980年代後半からは多くの種類のカモ類が、この川に越冬するようになり、文字通り「鴨」川となっています。カモ類は、越冬地をつかいます。鴨川でも、美しい羽を持った雄ガモが雌ガモに求愛している行動を、よく見ることができます。



コガモ



マガモ

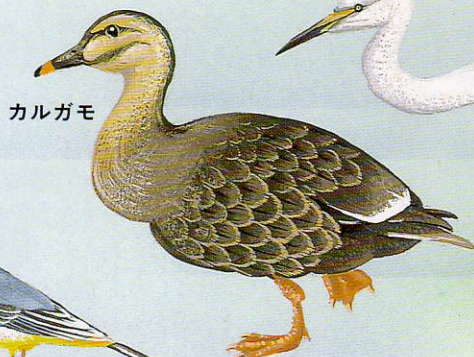


ヒドリガモ



オナガガモ(雄)

(雌)



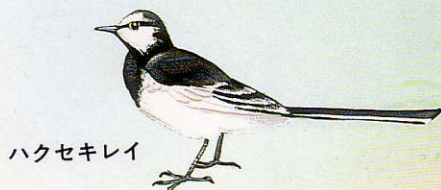
カルガモ



コサギ



キセキレイ

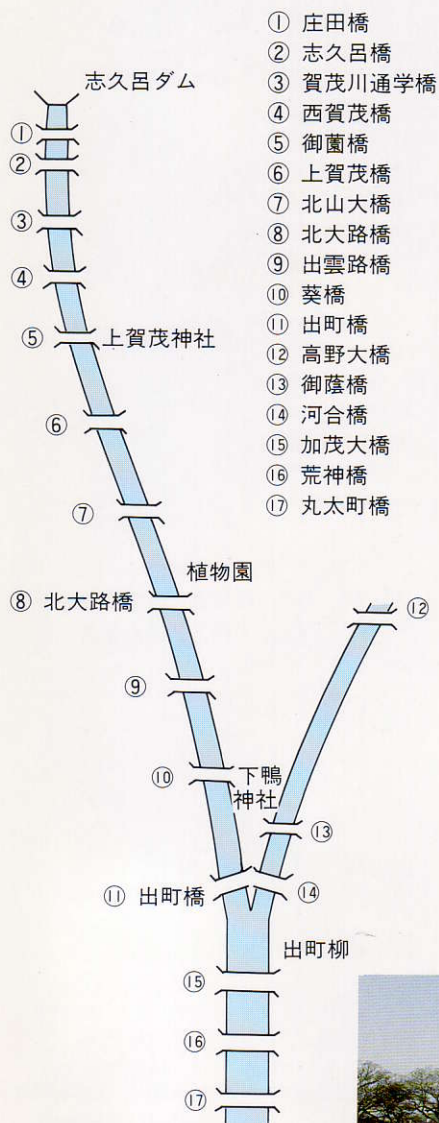


ハクセキレイ



セグロセキレイ

〔主な橋〕



ユリカモメのいる川

かつて記録のなかったユリカモメが、なぜ1974年から鴨川をはじめとする京都市内の河川で越冬するようになったのかは大きな謎です。鴨川だけでなく、1970年代の中ごろに、ユリカモメが新たに越冬をはじめたり、越冬数が増えた地域が多くあります。また、カムチャッカの繁殖地では、1970年代にユリカモメの営巣数が急増していることが明らかになっています。

数が増え、琵琶湖の湖岸だけではエサが足りなくなったユリカモメが、山を越えて、エサのとりやすい浅瀬の多い京都市内の河川を発見したのでしょう。また、人々が与えるパンくずも、ユリカモメを引き付ける原因となったことでしょう。

しかし、2月頃になると、多くのユリカモメが大阪湾で湧くイカナゴに引き付けられて移動することがわかっています。ユリカモメにとっては大切な鴨川、でも鴨川だけに依存しないたくましい越冬生活を送っているようです。鴨川は、たくましい生活をもった野鳥と人々が身近に触れ合える、恵まれた水辺なのです。



ユリカモメ保護基金

ずっとユリカモメと仲良く暮らしたい。ユリカモメを守り、ユリカモメをきっかけとして多様な野鳥の生活にふれ、彼らの生活環境を守りたい。そんな願いから、1993年3月、地元北大路商店街振興組合が中心となって出発した基金です。

活動の目的

■ユリカモメをはじめとする野鳥との信頼関係をつくります。

- 給餌活動：10月下旬から4月上旬まで、事務局でユリカモメへの給餌をしていますのでパンくずをご提供ください。

- 事故に会った個体の救助活動への協力

■ユリカモメをはじめとする野鳥がすみやすい河川は何かを探り、守ります。

- 市民探鳥会の開催、鴨川を美しくする試みへの協力

■ユリカモメの生態解明に協力し、その興味深い生態を多くの人々に伝えます。

- ユリカモメの生態研究の支援、講演会、コンサート等のイベント実施

■活動を支えるための基金にご協力ください。

〒603 京都市北区小山下内河原町69

「ユリカモメ保護基金」事務局

代表 川村 周仁

☎075-491-5918

振込先：滋賀銀行 北大路支店
普通預金 No.097212



一街のユリカモメ研究家

大槻史郎さんを偲んで—

○小冊子発行にご協力いただいた団体

- ・京都府「緑と文化の基金」
- ・北大路商店街振興組合
- ・滋賀銀行北大路支店
- ・京都紫野ロータリークラブ

発行：ユリカモメ保護基金
監修・資料提供：須川 恒
イラスト：竹井一宏
デザイン：横山英昭
企画制作：シルフ